



透明な檻の中で

「In the Transparent Cage」

KHJ岡山きびの会 ふじさん

はじめに

もし、この世界が完璧な檻だとしたら、どうだろう。

透明で、見えなくて、でも確かにそこに存在する檻。私たちはその中で生まれ、育ち、社会に適合するためのルールを教え込まれる。「枠からはみ出さな！」「空気を読め！」「みんなと同じでいなさい！」

そうして檻の形に馴染んだ者だけが、外の世界にいと信じて疑わない。だが、本当は違う。

社会が掲げる「平等」や「多様性」という理想の看板の裏側には、権力と利権が張り巡らされた複雑な構造がある。その仕組みは、まるで霧の中を進む船を、気づかぬうちに濁流に巻き込んでいくように、静かに、そして確実に私たちを分断していく。

「ひきこもり」や「いじめ」は、その檻の歪みによって生み出された悲鳴なのかもしれない。

これは、透明な檻の存在に気づき、その欺瞞を問い直すことを決めた、一人の若者の物語。

彼の言葉は、あなたの中に眠る「問い続ける力」を呼び覚ますかもしれない。

目 次

序章：透明な檻の住人	3
1. 回想：檻の中の暴力	4
2. 沙耶の葛藤	5
3. 対話と共闘	7
4. クライマックス：檻の抵抗	9
5. 結末：問い続けることの灯火	11
あとがき	13

序章：透明な檻の住人

深夜、キーボードを叩く音だけが部屋に響いていた。透は、モニターの向こうに広がる虚構の世界に、今日も言葉の刃を研いでいた。匿名ブログのタイトルは『透明な檻の住人』。その最新記事は、社会という名の「檻」について語っていた。

「俺たちは、檻の中にいる。その檻は透明で、とても見えにくい。みんなは『自由だ』と信じて疑わない。学校、会社、家庭、地域…どの檻に属するかを選べる自由があると。でも、それは単なる『檻の部屋替え』に過ぎない。少しでも檻の形に合わない奴は、静かに、そして巧妙に排除される。いじめ、ひきこもり。それは、この檻の住人が、外の世界に放り出された姿だ。」

記事を投稿すると、すぐに数件のコメントがついた。

「この社会は狂ってる。」 「その通り。俺も檻の外にいる人間だ。」

透は満足げにうなずき、そっとブラウザを閉じた。

彼が住む六畳の部屋は、透にとっての物理的な「檻」であり、唯一の「安全地帯」だった。窓の外からは、夜の街の静かなざわめきが聞こえる。電灯の明かりが等間隔に並び、まるで、この街の住人が皆、同じレールの上を歩んでいることを示しているようだった。

その光景をぼんやりと見つめながら、透は数年前の自分を思い出していた。あの頃の自分は、透明な檻の存在など知らなかった。ただ、学校という名の檻から逃げ出し、どこにも居場所を見つけられずにいた。

いや、知っていたはずだ。中学の卒業を間近に控えたある日、クラスで孤立していた一人の男子生徒が、屋上から飛び降りた。校舎の裏で、その救急車のサイレンを聞いたとき、透は動けなかった。声を上げることができなかった。彼は、自分自身も「檻」の中にいる住人として、見て見ぬふりをするというルールを遵守してしまったのだ。

「排除される奴を見て、見送る側でいること。それが、自分の居場所を守るための最優先事項だった。」

その日の、鮮烈な青空と、地面に広がった赤い染み。それは、透の心に刻まれた、透明な檻の「代償」だった。彼は、あの事件から、誰の顔も見られなくなった。あの時の、自分の「沈黙」こそが、彼を六畳の「安全地帯」へと追いやった真の理由だった。

透がブログを始めたのは、その孤独を埋めるためだけではなかった。これは、社会という名の檻に閉じ込められ、声なき叫びを上げる人々への、彼なりの回答だった。あの時、自分が果たせなかった役割を、匿名という仮面の下で果たそうとしているのだ。

その夜、教育行政に勤める一人の女性が、偶然そのブログ記事を見つけ、静かにスクロールしていた。彼女の名は、沙耶。教育委員会で、形骸化した制度改革の最前線にいる。理想を胸に抱き、制度の中で奮闘する、もう一人の「檻の住人」だった。

「いじめ、ひきこもり。それは、この檻の住人が、外の世界に放り出された姿だ。」

沙耶は、デスクに置かれた「いじめ防止対策推進法」の分厚い資料の上に指を滑らせた。彼女のいる場所こそ、まさに透の言う「檻」の管理室だ。法律、規定、マニュアル。それは、「問題が起こる前に解決したことにする」ための、透明な防壁。彼女は毎日のように、学校側からの「表面上の解決報告」と、保護者からの「助けを求める切実な電話」との間で引き裂かれていた。

「『部屋替え』に過ぎない……」

透の言葉は、沙耶がこれまで積み上げてきた努力、つまり「制度を改善すれば、人々を救えるはずだ」という彼女の信念を、根本から揺さぶった。彼は、制度の内側からでは見えない真実を、外側から、しかも匿名という最も安全な場所から、叫んでいる。

沙耶は、ブログのコメント欄ではなく、自分の手帳に、その記事のタイトルをメモした。

『透明な檻の住人』。

制度（檻の内側）で闘う沙耶と、言葉（檻の外側）で抗う透。二人の線は、まだ交わらない。だが、彼らが共有する「檻」という認識が、やがて、この街を、そして彼ら自身の運命を、大きく揺り動かすことになるだろう。

沙耶は、明日、通達しなければならない、ある高校の「いじめに関する再調査」の資料に目を落とした。その調査は、すでに「解決済み」として処理されかけている案件だった。彼女は、静かに決意を固めた。この報告書だけは、「檻」のルール通りには進めさせない。

「彼は、どこにいるのだろう……」

記事を閉じた後も、沙耶の心に透の言葉は残響していた。彼が本当に檻の外にいるのなら、彼こそが、この透明な壁を壊す鍵になるかもしれない、と。

1. 回想：檻の中の暴力

透にとっての小学校は、小さな社会の縮図だった。そして、彼はその中で、ごく自然に「異物」として扱われ始めた。

きっかけは些細なことだった。運動が苦手で、休み時間も一人で本を読んでいることが多かった。その姿勢は、集団行動を重んじる「檻」のルールから外れていた。そんな透を、クラスのリーダー格である男子生徒が目をつけ始めたのだ。

「おい、とおるー。お前、ほんとキモイな。」

はじめは、そんな冷やかしの言葉だけだった。しかし、やがてそれは、暴力へとエスカレートしていく。

透が上履きを隠され、廊下を裸足で歩かされた日。足の裏に感じた冷たい石の感触は、彼が「部外者」であることを宣告された刻印のように思えた。給食のパンをゴミ箱に捨てられた日。空腹よりも、自分という存在が「ゴミ」として扱われたことへの屈辱が、胃を締め付けた。

誰も見ていないと思っていた。だが、クラスの全員が、その光景を見ていた。そして、見て見ぬふりをした。彼らは皆、「和を乱さない」という名の、透明な檻の中にいた。

最も透を深く傷つけたのは、加害者の拳や罵倒ではない。廊下の端で、教室の窓際で、目を向けながら、すぐに視線を逸らした級友たちの、あの無言の動作だった。

彼らは透を見ていた。間違いなく、彼が苦しんでいることを知っていた。それでも、一瞬のうちに目を背け、本を読むふり、友達と笑うふりをした。その、すばやく averted gaze（逸らされた視線）こそが、透明な檻の壁を構成する最大の建材だった。壁は透明だから、彼らは「見ていない」という言い訳ができる。そして、透は、その壁の向こう側で、助けを求める声が届かないこと

を悟った。檻は、加害者だけでなく、安全を望む傍観者全員によって維持されていたのだ。

透は、担任の先生に相談することを試みた。彼の最後の、微かな「外部への発信」だった。

だが、返ってきたのは、期待とは全く違う、冷淡な言葉だった。

「透くん、君にも原因があるんじゃないか？ 先生はね、みんなが仲良くしてくれるのが一番嬉しいんだ。君も、もう少し頑張って友達と話してみなさい。」

その言葉は、透の心を深く抉った。「君にも原因があるんじゃないか？」——それは、いじめの加害者を庇い、被害者に責任を押し付ける、社会の欺瞞そのものだった。それは教師という「檻の看守」が、秩序維持を最優先している証拠だった。

家に帰って、母親に泣きながら訴えた。しかし、母親の言葉もまた、彼を孤立させた。

「透、あなたがいじめられるのは、きっと努力が足りないからよ。もっと明るく振る舞いなさい。社会に出たら、もっと厳しいんだから。」

母の目は、透の苦しみではなく、「自分の子どもがいじめられている」という世間体を恐れていた。彼女は、PTA や近所の目という、また別の小さな檻の中で生きる住人だった。その檻は、彼女に「問題のない、優秀な子どもを持つ親」であることを要求していた。母の言葉は、彼にとっての最後の逃げ場を塞いだ。家庭という名の「檻」までもが、彼を拒絶しているように感じられた。

透は、社会という大きな檻から逃れるように、自分だけの小さな六畳の部屋に閉じこもった。それが、「ひきこもり」という選択だった。

部屋の壁は、いじめや無関心から彼を守る、唯一の強固な壁になった。その壁は、彼の身を守る物理的な「檻」であり、同時に、安全な「要塞」でもあった。

彼はその日から、社会に出ることを拒絶した。そして、この「透明な檻」の存在を、自分の人生をもって理解していくことになる。いつしか、この六畳の部屋こそが、透明な檻の内部を見通すための、彼にとっての観測所となった。

そして、数年後。彼は、この自室から発信するブログに、あの教室で、廊下で、そして家庭で味わった孤独と、傍観者たちの沈黙を込めて、タイトルをつけた。

『透明な檻の住人』。

彼自身の人生の記録であり、また、あの時、自分を見殺しにした「檻の住人」たちへの、宣戦布告でもあった。

2. 沙耶の葛藤

その頃、沙耶は霞が関の小さなオフィスで、理想と現実の狭間に立っていた。彼女が配属された部署は、いじめや不登校、そしてひきこもり対策を扱う部署だった。

沙耶は大学時代、教育社会学を専攻し、子どもの居場所づくりについて深く学んできた。教育の力で社会を変えられると、本気で信じていた。しかし、いざ制度の内側に入ってみると、現実とはかけ離れていた。

彼女が担当する「ひきこもり支援プロジェクト」は、建前上は当事者に寄り添う制度だったが、

その実態は「支援実績」という数字を積み重ねるための道具に過ぎなかった。

「支援が成功した」とは、当事者が社会復帰したかどうかではなく、「相談窓口に接触した回数」や「マニュアル通りの手続きを完了した件数」で測られた。申請書類は複雑を極め、当事者やその家族が自力で辿り着くのは不可能に近い。それは、「本当に助けを必要とする者」を、書類の壁によって静かに選別し、排除するための、精巧に設計された透明な装置だった。制度は、当事者を救うことよりも、「行政が支援に取り組んでいる」というポーズを維持するために機能していた。

沙耶は、この制度の改善を訴え、ひきこもり支援の予算増額を試みた。だが、彼女の意見は、あっさりと却下された。



「沙耶くん。君は理想主義に過ぎる。我々は結果を出すことが求められている。仕組みを変えるには、もっと上の許可がいるんだ。君の情熱はわかるが、ここでは空気を読みたまえ。」

その上司は、温厚な元文部官僚だった。彼の言葉の端々には、「和を乱すな」「前例に従え」という無言の圧力がこもっていた。それは、沙耶が育ってきた社会全体に深く根付いた、見えないルー

ルだった。

予算を握る財務省の官僚からも、冷徹な言葉が飛んできた。

「ひきこもり支援に莫大な予算を投じる根拠は？ その費用対効果を客観的に説明できないのであれば、我々としては認められない。」

彼らにとって、個人の苦しみはデータの中の数字に過ぎず、理念や理想は合理性の壁の前では無意味だった。沙耶は、教育の理想論と財政の現実論の板挟みとなり、制度の巨大な壁を痛感した。彼女は、自身が「檻」を内側から変えるのではなく、「檻の潤滑油」として機能させられていることを自覚し始めていた。

深夜、疲れ果てて帰宅した沙耶は、ふとスマートフォンで「ひきこもり 教育行政 欺瞞」と検索した。彼女は、制度の欺瞞を告発する「声」を探していた。それは、彼女自身が喉の奥に押し込めていた、叫びたかった言葉だった。

すると、透のブログ『透明な檻の住人』が目にとまった。

「俺たちは、檻の中にいる。」

その一行を読んだ瞬間、沙耶の心臓は強く脈打った。まるで、誰にも言えなかった自分の内なる苦悩を、そのまま代弁されたようだった。そこに書かれていたのは、行政の資料には絶対に載らない、**当事者の皮膚感覚**で捉えられた真実だった。

「学校、会社、家庭、地域…どの檻に属するかを選べる自由があると。でも、それは単なる『檻の部屋替え』に過ぎない。」

彼女自身が、かつて教師という「檻の部屋」に入ることを考え、今は行政官という「部屋」に閉じ込められている。透の言葉は、沙耶がこれまで制度の矛盾に直面してきた自分自身の葛藤を、鋭い言葉で表現していた。ページを読み進めるうちに、彼女は透が「制度の外」から、自身の「檻」の正体を暴こうとしていることに気づいた。

沙耶は、自分の理想と現実の狭間で揺れ動く心を抱えながら、デスクに戻り、キーボードに手を置いた。彼女は、匿名でメッセージを送ることを選んだ。行政官としてでは、決して交わることのない相手。しかし、この瞬間、彼女は「制度の住人」であることを一旦停止し、「檻の真実を知りたい一人の人間」として、透と接触しようとしていた。

それは、彼女にとって、無言の圧力に満ちた行政という「檻」のルールに対する、最初で小さな**反逆の萌芽**だった。

送信ボタンを押す直前、沙耶は夜空を見上げた。夜の闇の中、透のブログという「声」は、彼女にとって、制度の巨大な壁を突き破るかもしれない、唯一の光のように感じられた。

くはじめまして。私は、あなたのブログに書かれている「檻」の中にいる人間です。>

メッセージは、すぐに送信された。

3. 対話と共闘

沙耶から届いたメッセージは、透にとって予期せぬものだった。最初は警戒したが、沙耶が送ってくる言葉には、制度の内側にいる者でなければ知り得ない、鋭い視点と深い葛藤が感じられた。

二人は匿名でのやり取りを続けた。透は「檻の外」から見た社会の欺瞞を、沙耶は「檻の内側」で直面する矛盾を語り合った。

「いじめの加害者が、なぜ責任を問われないのか。それは、彼らが『集団の和』という大義名分のもと、教師や大人から暗黙の了解を得ているからです」と透は書いた。「いじめは個人の問題に矮小化され、本質的な構造には誰も手をつけない。学校という檻が守りたいのは、子どもたちの心じゃなくて、自分たちの体裁なんです」

これに対し、沙耶は行政の視点から返信した。

「本当にその通りです。私たちが策定するいじめ防止のガイドラインには、被害者保護のための項目がいくつもあります。でも、現場では『加害者の人権』が盾にされ、問題の根本解決より、事態を穏便に収めることが優先される。制度は、市民を守るためにあるはずなのに、いつの間にか、制度を運営する側の保身のために機能しています」

さらに沙耶は、行政内部の冷徹な事実を透に伝えた。

「問題が発覚した後、教育委員会が最初に行うのは『情報リークの遮断』です。私たちの部署には、『重大事態』に認定されないための**非公式なチェックリスト**があります。いじめの内容がリストの項目に引っかからないよう、学校側から提出される報告書は、**都合の悪い事実を削ぎ落とすように再編集**されます。制度は、救済の扉を開くのではなく、問題をなかったことにする『情報操作の檻』として機能しているんです。」

透は、その内部情報に衝撃を受けながらも、自分の抱えていた猜疑心が正しかったことを確信した。

やがて、二人はブログでの対話に飽き足らず、より具体的な行動に移ることを決意する。

透は、いじめやひきこもりの体験談を匿名で募集し、その声をブログで公開することにした。彼自身の過去の経験から、「**沈黙**」が檻を強固にすることを知っていたからだ。

沙耶は、行政内部の資料やデータを匿名で透に提供し、制度の形骸化を裏付ける客観的な証拠を集めた。特に、特定の地域でいじめの「解決件数」が不自然に高い裏には、**当事者の声を無視した行政側の強引な終結処理**があることを示すデータを選んだ。

二人の「共闘」は、まるで静かな反乱だった。透の鋭い言葉と、沙耶が提供する事実が結びつき、ブログ記事はかつてないほどの反響を呼んだ。「透明な檻」の存在は、少しずつ多くの人々の目に映り始めた。

ブログへのアクセス数は、瞬く間に膨れ上がった。そして、その情報は、霞が関の深部、沙耶の上司である元文部官僚のデスクにも届いていた。彼は、不自然なほどに鋭い「**制度批判**」と、行政内部でしか知り得ない「**統計データの裏側**」が一致していることに、強い警戒心を抱いた。

「このブログは、単なる匿名の批判ではない。**内部の人間**が情報を流している可能性がある。」

元文部官僚は、財務省との密な連携によって築き上げた、自身のキャリアと利権を守るため、静かに**情報統制**と**犯人捜し**を開始した。彼は、沙耶の部署に不自然な監査を入れさせ、彼女のPCのアクセス履歴を密かに調査し始めた。

二人の行動は、元文部官僚と財務省が築き上げた「**利権と保身**」という強固な構造に少しずつ亀裂を入れていった。そして、そのシステムが自己防衛のために動き出した時、透と沙耶は、巨大な力との衝突を避けられない運命にあった。二人の匿名での対話は、「檻の番人」によって、今まさ

に断ち切れようとしていた。

4. クライマックス：檻の抵抗

透のブログ記事が拡散するにつれ、教育委員会や文部科学省、そして財務省の一部で、不穏な空気が流れ始めた。「これは、我々の仕事の妨害だ」という声が、上層部の間でささやかれるようになった。彼らにとって、透明な檻は社会の秩序であり、それを批判する者は「疫病」のようなものだった。

ある日、沙耶は上司に呼び出された。

「沙耶くん、君が担当しているプロジェクトのデータが、外部に漏洩しているという報告があった。心当たりは？」

上司は優しい笑顔のまま、しかし目は全く笑っていなかった。彼の背後には、「行政の信頼性」という名の、巨大で冷たい透明な壁が見えた。沙耶は一瞬、全てを話してしまおうかと迷った。だが、その言葉の裏にある「和を乱すな」「組織を守れ」という無言の圧力を感じ、口をつぐんだ。

「ありません」

沙耶の答えを聞くと、上司は表情を変えずに言った。「そうか。しかし、この件がこれ以上大きくなると、君のキャリアに傷がつくかもしれない。気をつけなさい。」

さらに上司は、机の上に置かれた「いじめに関する再調査報告書」を指した。それは、沙耶が唯一、ルールを破って提出を遅らせていた、問題が解決されていないことを示す報告書だった。

「この報告書、本来なら先月中に『円満解決』で処理されているはずだ。君の個人的な感情で、組織の業務を滞らせることは許されない。明日、指定通りの『形式的な解決報告』を作成して提出しなさい。それが、君がこの檻の中で生き残るための、最低限のルールだ。」

その警告は、制度が自らの保身のために発する、静かで冷たい抵抗だった。沙耶は、自分の無力さを痛感した。彼女は制度の内側で、手足を縛られていた。もし従えば、彼女の魂は完全に「檻」の一部になってしまう。

同じ頃、透の元にも、何者かからの脅迫めいたメッセージが届き始めていた。「黙らないと、居場所を突き止めるぞ」「お前の情報は、もう手に入っている」。メッセージの送り主は、透の過去の投稿内容や、使っているPCの機種など、**個人に強く結びつく情報を**仄めかしてきた。

透は恐怖を感じた。これまで、匿名という鎧に守られてきた。だが、その鎧は、いとも簡単に剥がされようとしていた。彼は再び、社会から排除されるかもしれないという、あの時と同じ恐怖に直面した。

あの時、クラスメイトが目を背けたように、社会全体が自分を排除しようとしている。恐怖で手が震え、マウスを握ることすらできなかった。彼の脳裏には、飛び降りた級友の鮮烈な赤い染みが、再び甦ってきた。「沈黙しろ。さもなくば、お前は外へ放り出される」という、檻の鉄則が彼の耳元で囁く。

夜、透は沙耶にメッセージを送った。「俺のせいで、あなたも危ないかもしれない。もうやめましょうか」

すると、沙耶から返信が来た。その返信は、**匿名という壁を超えて**、透の六畳の部屋に響く、力

強い「声」だった。

「私は、今、檻の中で初めて息をしている気がするんです。あなたの言葉がなければ、このまま何も気づかずに、制度の歯車の一部になっていたでしょう。もし、私がこの仕事にいられなくなっても、後悔はありません。私たちは、もう、あの時の『傍観者』ではない。」

その言葉は、透の心に火をつけた。沙耶は、彼が自分自身に最も赦せなかった「沈黙」と「傍観」という罪から、彼を解放放とうとしていた。



「俺は、逃げない。この言葉は、俺自身への約束だ。あの日の俺に、今、返す答えだ。」

透は、ブログのプロフィール欄に、本名と顔写真を載せる覚悟を決めた。自分の言葉に、自分の人生を賭ける。それは、社会の「努力」や「根性」とは違う、彼なりの決意だった。

彼は、自分の名前を「檻」の壁に刻むことで、もう二度と透明な壁の向こうに隠れないと誓った。彼は、本名を公開する最後の記事のタイトルを、静かにタイプし始めた。それは、彼の「ひきこもり」という名の物理的な檻から、社会という名の透明な檻へ向けた、最後の、そして最も力強

い「声」となるはずだった。

5. 結末：問い続けることの灯火

沙耶の内部告発の試みは、巧妙な制度の壁に阻まれ、表沙汰になることはなかった。彼女が密かに集めた証拠は、上司の周到な情報統制によって、公になることなく「紛失」として処理された。彼女は、責任を問われる形で地方の教育委員会へ異動を命じられた。それは、制度が「異物」を静かに排除し、**秩序を回復する**、見慣れたやり方だった。

透は、ブログに実名を公表した。

彼は、顔写真をアップロードした後、部屋の椅子から動けなくなった。しかし、数時間後、外の空気がいつもより澄んでいるように感じた。匿名という鎧を脱ぎ捨てた瞬間、彼は初めて、六畳の部屋の物理的な檻から、精神的に解放されたのだ。

彼の行動は、賛否両論を巻き起こした。「勇気ある告発」と称賛する声がある一方で、「社会に適合できない人間の逆恨み」「注目を集めたいだけのエゴ」と批判する声も多かった。特に、メディアは彼の「ひきこもり」という過去をセンセーショナルに報じ、彼の言葉の本質を覆い隠そうとした。

しかし、彼の行動は、静かに、そして確かに誰かの心に届いていた。

ある日、彼のブログに一通のメールが届く。

件名：ありがとう

「透さん、あなたのブログを読んで、僕も自分のことを話す勇気が出ました。僕は、今も部屋に閉じこもっています。でも、あなたの言葉を読んで、僕だけじゃないって思えました。僕は、透明な檻の住人だけど、いつか、この檻の壁を叩いてみようと思います。 **僕が今、部屋の壁を叩く音は、あなたのブログを読まなければ、ただの物音で終わっていました。**」

透は、そのメッセージを何度も読み返した。制度は変わらなかった。上層部の官僚たちが、自らの利権を手放すことはなかった。社会の欺瞞は消えていない。

しかし、彼の言葉は、一人の人間を絶望の淵から救い、新たな一歩を踏み出す「内面的な行動」**のきっかけを与えた。それは、彼が何よりも求めていた「傍観者からの脱却」という小さな変化**だった。彼がブログを続ける灯火は、消えることなく、次の誰かに手渡されたのだ。

数年後、沙耶は異動先の地域で、当事者や家族の声に耳を傾ける草の根の支援団体を立ち上げていた。その団体の活動は、複雑な行政手続きを代行し、**「制度の透明な壁」を打ち破るための、具体的な手助け**をすることだった。彼女は、行政官として制度の内側で闘うことを諦めたが、今、制度から一歩離れた場所で、自分の理想を別の形で実現しようとしていた。

彼女の支援団体は、決して行政の「成功データ」にはカウントされない。しかし、本当に救われた人々の笑顔という、数字では測れない確かな実績を積み重ねていた。

物語の終わりに、二人は再会することはない。透は今も、顔を出したブログで「問いを投げかける声」として存在し続け、沙耶は、**その声に耳を傾け、「制度の壁を乗り越える手」として活動**し続けている。

彼らの物語は、私たち一人ひとりの心に問いかける。

あなたは、その檻の存在に気づいているか？ そして、その問いを、いつまでも持ち続けられるか、と。

彼らが起こした小さな波紋は、巨大なシステムを変えることはできなかったかもしれない。しかし、その灯火は、誰かに気づきを与え、問いを継承させ、新しい時代の抵抗の形を生み出し続けている。



あとがき

この物語を書き終え、私は改めて「透明な檻」の存在を深く感じています。

主人公の透は、いじめと無関心という暴力によって、その檻の存在を痛感した人物です。彼は、社会の「和」という名の同調圧力から逃れ、自ら檻の中に閉じこもる道を選びました。しかし、彼はその閉鎖された空間で、むしろ真の「問い続ける力」を育み、やがて自らの言葉で社会へ反撃を試みます。彼の最後の決断は、制度を変えるほど大きなものではなかったかもしれませんが。しかし、彼の言葉は確かに、同じ檻の中で苦しむ誰かの心に届き、小さな灯火をともしました。

副主人公の沙耶は、理想を抱いて檻の内側から社会を変えようとした人物です。彼女は、制度の壁と利権構造という現実と直面し、一度は挫折を経験しました。しかし、彼女はそこで諦めることなく、別の形で理想を追求する道を選びます。制度の「歯車」から外された彼女が、草の根の活動を通じて自らの居場所を見つける姿は、私たちに「希望」はいつでも形を変えて存在することを教えてくれます。

そして、この物語に登場しなかった、しかし最も重要な登場人物がいます。

それは、この物語を読んでいる「あなた」です。

私たちは皆、程度の差こそあれ、何らかの「透明な檻」の中に生きています。それは、社会の常識かもしれませんが、家族の期待かもしれません。この物語は、その檻の存在に気づき、静かに「なぜ？」と問い続けること、そして新たな一歩を踏み出すことの大切さを描きたかったのです。

透と沙耶が歩んだ道は、特別なものではありません。それは、私たちの誰もが選ぶうる道です。彼らの物語が、あなた自身の心に問いを投げかけ、あなたの人生という物語を紡ぐきっかけとなることを願ってやみません。

2025（令和7）年11月

KHJ 岡山きびの会 正会員 “ふじさん”